

悲の器

高橋和巳



Kawade Paperbacks 14

悲の器

表紙絵 勝呂 忠

表紙構成 原 弘 (NDC)

©1962

昭和37年11月20日 初版発行

昭和37年12月27日 3版発行

定価 280 円



著 者、 高橋 和巳

発行者 河出 孝雄

印刷者 小笠原秀雄

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町3の8

電話 東京 (291) 3721~7

振替口座 (東京) 10802 番

印刷・秀好堂 製本・小高製本 落丁本・乱丁本はお取り替えます

長篇小説

悲^ひ
の
器^{うつわ}



罪人偈を説き閻魔王を恨みて云えらく、何とて悲の心ましますや、我は悲の器なり、我に於いて何ぞ御慈悲ましますやと。閻魔王答えて曰く、おのれと愛の網に誑かされ、悪業を作りて、いま悪業の報いを受けるなり。

——源信「往生要集」——

第一章

一片の新聞記事から、私の動揺がはじまったことは残念ながら真実である。もし何事もあかるみに出ず、營々として構築した名誉や社会的地位が土崩することもなければ、現在もなお私は法曹界における主要メンバーの一員であり、また大学教授としての精神的勞作いがいの負担は私の魂には加わらなかつたであらう。傷ついた私の名誉は、しかし私が気に病むほどには人は気にしていない。また、私自身、事態を悲しんでいるわけではない。愛のことどもについて、ほとんど考えてみもしなかつた学究生活においても、考えてもなんの結論もえられぬことを知った今も、私は悲哀の感情とは無縁であつた。私がかつて最高檢察庁検事であり、法学博士であり、いま某大学法学部教授であるゆえに、新聞関係者のセンチシヨナリズムがとらえた私



の事件も、けっしてそれほど特異なものではなかった。新聞はほ次のように報道した。

妻をはやく喉頭癌で失った某大学法学部教授正木典膳（五十五歳）は、ひさしく家政婦と二人、不自由な暮しをしてきたが、このたび友人である最高裁判所判事・岡崎雄二郎氏の媒酌で、某大学名誉教授・名誉市民栗谷文蔵文学博士の令嬢・栗谷清子（二十七歳）と再婚するはこびとなった。ところが突然、家政婦米山みき（四十五歳）により、地方裁判所に対し、不法行為による損害賠償請求（慰謝料六十五万円）が提起された。

この記事のあとに、家政婦米山みきの写真と、肉体をふみにじり、女ひとりの運命をもてあそんだ人非人とまで極言した、はげしい憎悪の言葉が掲載されている。すこしく客観的に緩ってゆくなら、人はその三日後の三面記事に、大学教授正木典膳が、逆に家政婦の発言を地方検察庁に名誉毀損罪を構成するものとして告訴したと報道された一文をよみうるだろう。そのまた数日後の学芸欄に、さる漫談家と婦人評論家の対談と、農家の主婦の投書、そしていわゆる進歩的文化人の寸評が、この事件に関してのっている。対談は、私を名譽の鬼、人情味うすい法律家と解して家政婦に同情的であり、農家の婦人は恋愛の自由をのべたのち、裁判所に解決の場をもとめる人間関係の不幸をあわれんでいる。社会評論家は、傲慢にも当事者二人の精神の均衡をうたがっており、私を躊躇なく滅びの道をあゆむ人

格と規定している。某作家や、おなじ大学の東洋史科主任教授が、かつて話題を提供した、老いらくの恋の清潔さが感じられぬという論旨である。しかも、某週刊雑誌は、家政婦を娼婦あつかいしたのかという記者の質問に、「いや、おそらく、わたしは米山みきを愛していた。」と答えたその言葉尻をとらえ、私が再婚するはずであった栗谷清子をひきずりだし、私の態度を批評させている。しかし、なによりも私を動揺させたのは、その翌月の綜合雑誌に掲載された私の末弟、都内中央教区某カソリック教会神父正木規典の弾劾文であった。代々学者を出す正木家のうちで、幼時より孤独な夢想癖をもち、芸術的感受性にめぐまれて一家の異端であった末弟は、その異端ゆえにかえって兄弟の敬慕ふかく、もっともよき私の理解者であった。彼が私の言葉のよき理解者であるばかりでなく、青年のころ画家志望であった彼が、宗教界に捨身する転志についても、長男の私は、鬼神を語るぬ儒者の遺風をついで頑固であった父、漢方医正木典之進へのよき脱得者だった。ジャーナリストや局外者の無責任な類推批判や陰口に、「何をいうか。」と思っていた私は、弟による、こうしたいわば内側の疼きを予想していなかった。いやむしろ、このたびの不名誉に關しても、末弟がもっとも物わかりよい同情者たるに相違ないと思ひこんでいたのである。社会的事件に対処する方法、それを位置づける価値感などは、つねづねほとんど裏返したように、この法律家と神父は違っていた。しかし、

根源的な発想の仕方はその息吹きまで煩に感じられる共通項をもっていたものである。弟は、しかしそれゆえに私の暗黒を予見し、なんの注釈もなく、二人の女性に同時に愛着し、しかもそれを押しとおそうとするエゴイズムを、断じて恕されざる人間の罪惡として述べていた。私は弟になにも説明したおぼえはない。にもかかわらず、家政婦の申したてや婚約者の談話とはまったく無關係に、かつまた世の非難とはまったく異った地平から、私の汚濁を仮借なく糾弾した。率直にいえば、弟の弾劾によって、本当に私がなにを欲していたのかを知らされたようなものである。そして、まさしくそれによって、はてしない私の日々の墜落が始った。私の怒りの対象は、同門でありながら、米山みきをそそのかして対立した弁護士ではなくなった。名誉毀損の告訴の対象は、いつしか明確な輪郭をうしない、私には見えぬものと闘いはじめねばならなかった。いまとなって、私が傷つけ私の手許を離れた、まさしく弟の難詰するところの複数の愛人を愛惜する未練はない。素戔とした無人の家屋、孤独な書齋に耐えるのは、世人が思うほど困難でもない。しかし、私は暗示にかかった家禽のように、行動の統一性をうしない、自己におびえる人間となった。私は名誉毀損の告訴をとりさげるつもりはない。法に抵触する事実が断じて事実であり、中傷の内容はいかにかわらず、あきらかに名誉毀損した人物に対して、法律は私の味方である。この人間の現実において、私が最後の拠

点とするのも、私の法律家としての名誉にかけて常に法である。姦通罪は法律的に成立しないことはいまやこの日本の現実であり、もしそれを不合理とするなら、訂正するための正当な法律的手続きと合議、決定を必要とする。議會、立法機關の任務であつて、私の容喙すべき筈合ひではない。かつまた私は姦通者ではない。家政婦米山みきとの交情、婚約者とのあいだの關係も、独身の、それぞれ独立人格者である婦人との合意のうへで結ばれたものである。かたちなき女性の感傷に法律は無縁である。ほかならぬ人間の作りだした人間の法律とその理念は、神の意志がかりに存在するとしても、それよりも尊重されねばならない。革命思想に好意的でない私も、もしまったく人間の合理的意志と行為により遂行されるならば、私はそれを尊重する。私がその変革の日に葬りさられるとしても、私は拍手を惜しみなく贈るであらう。まどわしい法廷論争も、私の勝訴に終ることは間違いない。私はそれによって正しいのであり、なにびとの干渉をも拒絶する権利をもつ。しかしただ一つ、「長兄に与うる弾劾文」が見抜いたように、私が防禦できぬ私の論難者がこの世界に存在しう。それは、米山みきでも栗谷清子でも、今はなき妻でもない。それはほかならぬこの私である。五十五歳、辛苦に困苦を重ね、世界の、いやすくなくとも日本の刑法思想に重大な訂補を加えた正木典膳の、それがみじめな現実である。

家政婦米山みきは、六年以前、亡妻静枝が喉頭癌の診断をうけ、たすからぬ病床に臥せたころ、私のすぐしたの弟である、戦後の学制改革によって昇格した山陰の某大学経済学部教授正木典次の紹介で雇ひ入れた。むかしその城下町の某女学校の家政科の教諭をしたこともあり、英語の知識もいささかあるゆえ、女中仕事だけでなく、蔵書の整理や書類の分類など、私が必要とする援助にも適任であろうと実弟は薦めた。彼女は支那事変で夫、米山正次郎陸軍大尉をうしない、二人の間の子供を発疹チフスで失つてから、当時はまだ旧制の高等学校であつたその大学の事務員になつてゐた。以後ずっと教務課でもっぱら雑用に従事してゐたわけだが、典次のもらした家政婦入用の話を聞き、みずからすすんで單身、上京してきた。なぜ、官公庁よりも不安定な個人の雇傭に応じたのかと、最初の面接のおりに言つた私の問いに、彼女は、「女ひとりのアパート住いよりは……。」と語尾を濁して答えた。

「いつまでいていただけるかわかりませんよ。」と私は言つたと思う。

「結構でございます。」

答えは奇妙に諦念に満ちてゐた。ひさしく開かれなかつた応接室のブラインドを当然のことのように彼女はあげた。家の中はかろうじて片づいていても、庭や生垣にまでは手が廻らなかつた。とりわけ貝塚の生垣はほしいままに

のびて、部厚く埃を積んでいる。彼女は小さな丸顔をほころばせ、しばらく庭を眺めながらくすくす笑った。ちょうど、茶を持ってでてきた派出看護婦に彼女をひきあわせ、いっしょに妻の病室に行ってもらった。その夏、私は、日本学術会議の予諾をえ、日本刑法学会が主体となって内々に企画しつつあった、世界刑法学会の日本開催の準備、おもにその準備資金の問題で頭を悩ませていた。戦後の混乱はまだおさまっておらず、海外の諸大学との連絡も不十分だったが、文部省や外務省も、他の学科にさきだって、世界的学会の日本誘致を計画した刑法学会の意図は一応了承していた。憲法改正にともなう、訴訟法の原則転換、および刑法や民法の急速な改正は——私も最高検察庁側の委員として刑法部門に加わった、改正案起草委員たちの冷汗のするようなあわただしい会議続きのすえに、一応の形はついていた。とくに刑法は、民法や、新たな労働法の困難に比較すれば、訴訟精神の原則的變更に抵触する部分を削除し、罰金額等をなかなば機械的に變更する方針がとられたゆえに、処置は比較的に簡単であったともいえる。しかし、その簡単さは、治安維持法や思想犯保護觀察法の撤廃あるいは効力停止が、連合国最高司令官により伝達された「政治警察廃止に関する覚書」によってはじめてなされた事実に象徴される非自律性の連続を意味した。あるいは改訂し、あるいは削除しながら、背後に確立されてあるべき理論がなかったのだ。それゆえに、本来のかたちを転倒し

た、その理論的裏付けを、早急にまとめあげねばならなかった。事実、各政党や著名人、弁護士会や駐留軍からだされた改正意見書は、ばらばらに食い違っていて、改正の全域にわたって、それを包摂しうる首尾一貫した理念はなかったのである。部分的に鋭い進歩政党の意見書も、全体的な法律学的水準はひくく、未来を考慮するに不得意な日本の知性の悲惨さから抜けたでせいでなかった。ガリ版ずりの参考資料をもちよって、委員たちが回をかきねた一種情けない会合の記憶は、まことに後味がわるく、その後味のわるさは、法務省も政党も、学者も裁判官も検事も、共通してになわねばならない。法学会は、貪欲に、閉ざされていた海外の知識を吸収する必要があった。その急務ゆえに、人文科学部門のうちでは、当局は法律学研究の予算割当ても好意的だったのである。だが、その意義は充分に認めつつも、破綻なお癒えぬ国庫が、われわれが必要とみとめる諸経費をそのまま計上してくれるとは考え得なかった。薬学や機械工学や建築学などにある民間会社との接触が法学にまったくないわけではない。たとえば民事法学関係ならば、電力会社は補償問題、船舶会社や貿易業者などは、国際法や諸条約解説などの知識給与の恩恵があるから寄付金をつのるのも困難ではない。しかし、刑法学の世界には検察行政官の政界との個人的関係は別として、学界としては中小出版社がいかに、財閥や法人との利害関係がなかったから、予想される不足資金をあつめることはほとん

ど絶望的な仕事だったのである。連絡方は渡欧中の憲法専門の国原博士に託し、私および海外の学者の招聘のための準備委員たちは、もっぱら個人的知己關係をたどり、その準備資金の捻出に貴重な研究時間をさいていた。死期のせまっていた妻に対しても、その期間、私はほとんど冷淡だったと記憶する。しかし、それはやむを得ないことであったし、私がなにを配慮しようとして、妻は、しよせんたすからず、その病いは私の配慮の外にあったのである。

病室からさがって来た米山みきは、再び応接室の窓辺に立つと、「奥さまがお可哀そうでございます。」と小声で言った。

私には子供が二人いる。その当時、長男の正木茂は、私の勧告を無視して北海道大学で醸釀学の研究をしていた。大学院に進んだばかりであったが、法学をどうしてもやろうとしないのである。息子の専攻選択に関して、私は嘴を容れぬようにつとめてきた。彼が経済を選ぼうと文学をなそうと、物理学でも電波工学でもかまわないと思っていたが、醸釀学専攻というのはまったくせなかった。なにより、情熱を自己の専門分野に全身でそそこんでいるという素振りが見られなかった。父の名譽をそこなわぬ程度に、のんびりと生活するという、おそらく母親に似たのだらう、覇気に乏しい青年だった。また娘の典子は、女学校在学中にさる銀行家にもとめられ、その次男の若い支店長に嫁いで関西に住んでいた。飛びだすような早すぎる結婚

は、確定的な診断をくだされる以前から、床に臥せがちで不機嫌な日々を送り、ときには常軌を逸することもあった母親からの逃避であったかもしれない。

「お子さまをお呼びもどしにならないのでございますか。」と米山みきは茶をすすりながら言った。

「勤めていただくことにしようと思うが、家庭のことにはいっさい口出ししないという条件をつけておきたい。」と私は答えた。「あなたの事柄に関して、履歴書と健康診断書と、弟からの手紙で現在わたしが知った以上のことはたずねませんから。」

「わたしのことは、別におたずねくださってかまわないんでございますよ。先生のおっしゃいますとおり、わたくしのほうから不要なことを申しあげてお煩わせはすまいと存じますけれど。」

「なにか質問はありますか。」

「いいえ。でも、毎日、一週間の大体の御出勤の御予定と、ご帰宅のお時間をおっしゃってください。」

「その都度、それは言いましょう。ただ、朝は十時前、毎日、学校から自動車を迎えにくる。」

「おそう菜になにかお嫌いなものはございまして？」

「いや別に。」

「お風呂は毎夕おたきしまししょうか？」

「隔日でもいい。しかし、妻は毎日体を拭いてやってください。経済にそれほど余裕があるわけではないから、あなた

が仕事に慣れば、派出看護婦にはひきとってもらうつもりにしている。」——「家具、その他一切は自由に使ってください。それもそのうちにわかるでしょう。わたしにそれは聞かれても困る。ただ二階の書斎は、わたしの不在中は入らぬようにしていただきたい。大事なものがあからずかではなく、書物やカードの位置を動かされては困るのだ。書斎の掃除は、だから、日曜日の朝だけで結構。煙草盆のちり捨てや、その他整理の要のあるときは呼びますから。」

「かしこまりました。」

「床は、……うちには女中部屋などはないが、さあ、それは妻に聞いてもらおうか。子供たちの居間が空いているが……。」

「奥さまにおたずねします。」

「当分、電話もないだろうが、誰はどういう人ということ、は、できるだけ早く覚えてほしい。」

「はい。」

事務的な応答のあいだにも、彼女が惻然な女性であることは充分に察知できた。最初に受けたいくらか淋しそうな印象以上には、私はほとんど容貌や姿態に特別な注意をはらっていなかったが、暗い翳のあるという人柄ではなかった。それは病人の看護も兼ねてもらわねばならぬ役割りに適して、私は満足したと思う。

「給料は……。」と私が言いかけたとき、「いいえ、そんな

こと。」と彼女は制した。しかし雇傭である以上は、条件・給与・休暇などは事前にはっきりと契約として取り交わさねばならない。それが私の主義でもある。結局、私の本俸の七分の一と決定した。ちなみに私が大学奉職からうる報酬は、当時、月収四万二千円だった。

私は文学者ではない。事実性と論理性のほかに文章を必要に飾る刻鏤に対してはあまり好意的ではない。私は事実の証拠とそれを構成する部分としての人的動機——心理ではない——にしか十全の興味をおぼええぬ性格である。長年の職業的訓練が私をそのように鍛えたのであり、みずから作りなしたその性向に対して私に不満はない。いま私はやや不明瞭な動機からこの文章を綴りはじめたが、すくなくとも部分部分に関しては厳密にタートザッヘ・ヴァールハイトをあげておこうと欲する。私の学問的立場からみて、必要だと思われる事件とその経過の記述は細大漏らさずなすであらう。だが逆に不必要な事柄は、その事柄の善悪、美醜にはかわらずすべてこれを省略する。

米山みきとの交情の発端は、日時を正確には記憶しないが、準備しつづあった学会が条件未熟のまま暫時見送りと決定し、ただ例年の日本刑法学会に二三の海外専門家を招待することに結着して開催された、その会合終了の日だったと記憶する。会合の成果はかならずしも満足すべきもの

ではなかったが、気軽に招待に応じた海外からの賓客中に、私の短いドイツ遊學時代の旧友を見出したことは私人にとつて得難い喜びだったし、資料交換のたどていた暗い期間の、研究者の消息や学会の動向・成果を忌憚なく語りあえたよろこびも、その会合全体への不満をいくぶん補ってくれた。幹事会では、失敗におつた世界刑法学会開催の志向は、今後も継続さるべきことを再確認しあい、昼餐会のもの、日光見學におもむく海外諸友を駅頭に見送つて、ビールの酔いにととうとしながら家に帰つた。開け放つたタクシ一の窓から吹きこむ風は、そのときすでに秋だった。裏の丘陵のすばやい黄葉を眺めながら私は風呂に入り、その背中を米山みきが流してくれた。妻は睡眠剤をのんではやくからねていた。秋から冬にかけて、渴水期にはそのころしばしば停電した。翌日の講義準備を幾度その停電にさえぎられたことであらう。参考文献を机上にならべ、さあこれから、というときに、きまつて停電する。それゆゑ、私の生活は一種奇妙な混乱状態におちいつていた。まず夕食後、十時すぎまで一たん酒か睡眠剤の力をかりて床につき、深夜、講義ノートを作製して、薄明にふたたび就寝するのである。私はその日、軽い夕食後、すぐ二階で寢床に入った。なにか空虚な肌寒さと、やつと責任から解放されたものの、そのさびしい成果と華々しきかつた予定との落差感から、容易には寝つくことができなかった。もっとも容易にねむれぬ理由が、自覚したくない別の

理由のあることにも、私は気づいていたと思う。

麦茶をもつてあがつてきた米山みきに、ひさしぶりに寛いだ気分になっていた私は、そのことを冗談に言つた。

米山みきの返答は、そのとき、なぜか私の知らずして過してきた人間の世界、いわば背後の世界を教えるようなニュアンスに富んだものだった。

「最初一カ月ほど、先生を冷たいかたのように思つておりました。」

私は無意味に笑つた。

「でも、そのうち、お気の毒なかに思えはじめました。」

「気の毒？」

「先生はなにもご存知ありませんもの。」

「なにもとは失礼な。」私は煙草をとつてもらつてそれに火をつけた。

私の実力は、恩師宮地経世博士の特別な推挙がなくとも、早晩、私が現在到達している地位を当然獲得すべきものだった。劣者や敗者が、私の幾分はやかたの成功を、恩師の姪と結婚したことに帰して、誹謗し嫉妬する事実のあることを知らぬわけではなかった。しかし、ある幸福を与えられたとき、その幸運を生かしうるか否かは、いつにその人間の實力と努力にかかつている。僥倖の訪れるや否やは、天の命であつて私の知るかぎりではないのだから。私は助手から助教授、そしていったん実地に裁判にたずさ

り、ふたたび教授に復帰した。その経歴に関して、私は自信をもっている。私の配偶者が誰であろうと、私はそうなかったらう。結婚したとき、妻はすでに処女ではなかったが、そんなことは大したことではないし、いまでももちろん大したことと思つてはいない。だが、そのとき、なぜか不意に奇怪な幻覚の世界に私はおちたようだった。私はとりかえしのつかない、奇妙な錯覚をしてきたように思った。「奥さまをお愛しになつていらっしやいませんのね、先生は。」

「なにを言う。」

「奥さまのことを何もご存知ありませんのね。」

「最初に条件をつけておいたはずだったと思うが……。」

「反射的に私は起きあがつていた。」

「申し訳ありません。」

彼女はおびえたように後ずさりして頭をさげた。しりぞいてゆく家政婦にむかつて、私はビールを買つてきてくれるよう注文した。

「夫は酒呑みでございました。」と米山みきは酌をしながら言った。私は彼女が注いでくれるままにコップの数を重ねていった。つまみのあられも食べつくし、——そして不意に、私は彼女に肉体を要求した。その言葉は明記することではないが、暴力を用いたのではなく、言葉で言ったのである。

「男のかたは遊びですみます。けれど、女はきつと泣かねばなりません。」と冷静に彼女は答えた。

「いや、失礼なことを言つた。忘れてください。それから、もう下りてやすんでください。」と私は言つた。

「水をもつてきておきましよう。」

なにこともなかったように米山みきは立ちあがつた。私は、水を、いや水を持つていたのだろうか。私はみずから無理じいに起きあがつて書物を取りだし、明りを電気スタンドに切換えてそのページを切つた。弟子の一人が書いた刑法思想史であつたが、残念ながら上出来のものとは言えなかつた。語学力はともかく、まだ鳥瞰的な著述をするのに充分な蓄積がなされていない。私は適切と思われる批評の言葉を考え、また私の編集する法学雑誌に論文を書いて不備をおぎなうよう薦めることで、厳しい批評を緩和するのが適当だろうと考えた。だが平生なら、思ひたてばすぐ手紙の筆をとる私が、そのとき、妙におくくうで書斎へいく気がしなかつた。

米山みきが水さしを捧げ持つてあがつてきたとき、私は幽かな香料の香りを嗅いだ。振り仰ぐと、眉のところが濡れており、小さな円顔の、小さな鼻頭にのびずにかたまつた白粉のあとが見えた。私は憐愍の情を隠すことができなかった。人は男性の身勝手と思うだろうが、私は真実、そのとき、彼女を愚かなわが兎のようにあわれに思つた。そして、敏感にその気配を察したのだから、彼女は声を抑え

て涙を流した。

「悪かったと思う。あなたには、わたしが雇主である以上、わたしの発言は、男女の間という以外の強制力を心理的にもちがちだ。わたしにもあらぬことを言った。なにもなかったことにしていただきたい。あなたは不安定な生活をされてきた。わたしが妙に根にもって、あなたを解雇したりすることは絶対にないから、どうか、下りてやすんでください。」

「そんなことで涙が出たのではありません。」

「互いに話のわからぬ齡ではない。」

「いいえ。」

すでに四十に真近い年齢は争えなかった。米山みきの目の尻の皺を伝わって涙はおちた。

「お憐れみになるにしても、憐れまれるかたが違っておりまます。」彼女は足もとのほうに廻って、あわせの帯を解いた。今度は強く香水の香りが匂った。

「わたしは法律家だ。」

無意味に私は言った。帯を解いた襦袢の前をあわせながら、米山みきはうつぶせていた私の蒲団の横によこたわった。

「妙にうそうそと寒い。」と私はまたしても無意味に言った。

「虫も鳴きやみました。」

「わたしは……。」

新聞に醜聞として私たちの関係が報道され、また新聞記者が、執拗に再婚の相手のことを尋ねたあげく、米山みきに対する私の感情を問うたとき、私が答えた言葉に偽りはなかった。極度に潔癖な、いくぶん感傷的な文学者のように、いつの場合にも虚偽を語ることを罪惡だとは私は思っていない。自己の生命や基本的権利を守るためには、人は虚偽を言つてよいし、嘘一つ言わぬ人間など、現実には存在しない。だが、「おそろくは愛していた。」という発言が、性急な人にはどんなに曖昧に聞えようとも、私の精神状態を伝えるべきもっとも適切な言葉を選ぶなら、いまでも、とっさに言つたその一句を繰り返すことになるだろう。

私には理解できぬ、変節にひとしい性格転換が、のちほど米山みきにあらわれた。しかし、すくなくとも、それ以前は、聡明で直感力に富む、立派な女性であつたと信じている。私には欠けているものを、豊富にそなえていた。私になかったもので、彼女にも欠けていたものは、あの人若さVぐらいのものだった。

翌日、私は講義を二時間すますと、すぐ家に帰った。玄関に迎えた米山みきにカバンを手渡すと、私は妻の病室に入った。いや、その前に風邪ぎみの喉をうがいしに、洗面所へいった。米山みきが、手拭を手籠に入れて、待るように横に立った。私が病室へむかう廊下を歩みだしたとき、家政婦の伏し目の顔があげられ、一瞬、頼りない少女のよ

うに顔を皺くちやにした。しかし、そのときにも、なぜかまだ私は自信をもっていた。

病室は奥の小庭に面している。しかし、庭は荒れ、部屋には日の光はなかった。光の代りに、その病室に瀰漫しているものがあつた。それは癌患者特有の、はなはだしい腐爛臭だった。静枝の吐く息は、いささか下品にすぎる比喩とはいえ、あえて言うなら、悪酒に悪酔いした翌日、宿酔の日の排泄物の臭氣に似ていた。

「近ごろ、お元氣そうになりましたのね。」嗟れ声で、私が言うべき言葉を妻が先に口にした。「お顔の色がよろしいようです。」

「お前のほうはどうかね。」

病床全体を視野におさめたとき、枕もとの小輪の花が、意外に鮮明だった。なんとという花なのか、植物の知識に乏しい私にはつまびらかではなかった。またしいて尋ねるほどのことでもなかった。私は、自分の健康が、たしかに妻の指摘どおり順調であることを、学会開催の責任と雑務から解放された気安さと関連させて説明した。もっとも、そんなことに静枝が興味をもていないのは、百も承知のうえだった。妻には一種家禽の雛とでも名付くべき身振りがあつた。彼女が健康であつたところは、私のするやや専門的な時事問題の解説や、学内の人事移動などに答えて、礼儀正しい返事をしたものであつた。それが人の道になつておりましよう、とか、いろいろなことがございますのね、と

か。妻は私の話などまったく聞いていなかったのだが、傲慢で、また長い教育者生活の中で、教授者たる自分の意見を人とはかならず傾聴するものだと思ひこんでいたために、そのころの私は、静枝がただ口先きだけであくびを噛み殺していたことに気づいていなかった。しかし、妻の痼疾の絶望化するにつれて、妻はもう演技をする体力——そう、ちょっとした思いやりすら、人間には地位や余裕や体力が必要なのだ——を失つたのだつた。

米山みきが、襖の外から、何か用事がございましたら、と声をかけた。足音はしなかったから、もしかすると初めから廊下にたたずんでいたのかもしれない。

「お茶をもつてまいりましょうか？」

「米山さん。」と妻が癪を無理におし殺したような声で叫んだ。

「香をたててください。お部屋の香がきれたようだから。」

「はい。すぐ入れ換えます。」足音が廊下を遠ざかった。

「わたしのためなら別にかまわんさ。」と私は言った。

「わたくしは幾ら香を焚いても、香水をふりかけても、もう鼻がきかなくなりました。膿の臭いもしない代りに、なんの匂いもしません。」

顔をあらぬ方にそらせるとき、それは能面のように不気味に光り、俯せられれば、はや、それは一箇の死面だつた。

妻の衰弱を克明にたどってゆくことは、私の力にあまる作業である。また、私はまだ読んでいないけれども、妻が毎日書き綴っていた日記にそれは記されているであろう。その遺書の公表が私の事件の開示に必要であるなら、それが必要と考えられる時期に、それを公開してもよい。人の

死の有様、死に近よる踰越とした足どりを私は書きとろうとするのではない。妻は不運な女性であつたけれども、現代の医学ではまだどうすることもできぬ疾病にとり憑かれた以上は、仕方のないことだつた。それよりも、やはり書いておくべきことは、その日二十分ばかりの妻との会話の中に、不意と、すでに妻が私の犯した行為を知っていると思われた節々のあつたことである。病人特有の過敏な神経でかんぐっているという印象ではなかつた。妙な言い方だが、はっきりと知っていて、それを致し方ない必要悪、いや善悪以前の必然的事態と判断しているらしいことが私に感じられた。

「早う、死にとうございます。」という表現を妻はとつた。「何かしたいことがあれば、何でも言うがいい。」

「昔なら、したいこともございました。」礼儀ただしく妻は答えた。

家政婦が香炉を入れ換えているうちに、私たち夫婦は、硝子の面を両側からひつ攝くようないらだたしい会話を交わした。

「どういうことかね。」

「今はもうなくなりました。」

「今では出来ないことかね。」

「できても、お慈悲ではしていただきたくない人間の誇りというものがございます。」

二人の子供たちからはそれぞれに、ときおり手紙が届いている様子だつたけれども、もっぱら母親宛にくるその手紙を、妻は私にみせようとはしなかつた。私たち夫婦の間には行き詰つた会話を打開する共通の話題がなかつた。母親にあつて何事を訴えてくる文面に、別段、子供たちの恥が表われているわけでもなかつた。それを私も共に見て悪いわけはなにもない。しかし、自分だけの領域をもつことが、彼女の精神の安定にくらかでも寄与することならと、私は看過してきた。私は心理家ではないが、人が支えられるのは究極のところ、連帯意識ではなく、思いたかぶつた個我的意識や秘密の感情であるらしいことは、うすうす了解されていた。虚榮するにせよ、権力を意志するにせよ、人は連帯感が欲しくてその愚に踏みこむのではあるまい。妻は黙つて体を夜具に横たえ、枕もとのラジオのスイッチを入れた。軋むような提琴の音が流れた。音で匂いが消せるわけではないが、どんな関係にある人間にせよ、なんの媒介もなく面とむかつて対峙すれば、かならず衝突する心理や自尊心の葛藤を、さりげなくそれるだけの効果はもつ。喫茶室に絶えまなく音楽が流れ、商談のための料

亭には庭に噴水がふき、郊外の旅館の窓外には展望が開かれてあるのも、人の同じ心の動きの要求からでるのだろう。私は音楽は嫌いだった。音楽は、苦心して凝集した思考の厚みを切りくずすゆえに、美しいものほど私は嫌いだった。妻がそれを知らぬはずはなかったが、私は耐えていた。

しばらくの沈黙の後、不意に妻は、

「出ていってくださいませ。」と言った。

「なにを言う。」

「ひとりにさせてくださいませ。」

「それがわたしにむかっていう言葉か。妻が夫にむかって言うことか。」

襖が細く開いて、米山みきが闕に手をついて頭をさげた。

「奥さまのおっしゃるようになって。」

そのときもまた私は、いままで私がまったく無縁に過してきた、そして出来ればそのまま素通りしたほうがよかった、奇妙な醫のような世界のあることを知らされた。誰がことあらためて主張したわけでも、静枝や米山みきの、どの動作が暗示になったというわけでもない。ただ、顔をふせて米山みきが私に懇願し、それを妻が顔をそむけて聞きながし、つぎに沈黙がおとずれた、ただそれだけの事件、供述書に書くならば、三人の存在と氏名と、夫、妻、家政婦と、その関係を示すにとどまるだろう状況の中に、私は

歴大な、私の知らなかった世界のうごめきを感じさせられた。それが何であるか、その時にはわからなかった。今はいくらか、私にはわかつているけれども、わかつてみたところで、なにが変化した、なにが進捗するというわけでもない。にもかかわらず、わかつてしまったある認識は、どんなに努めても二度と白紙にはもせえない。無為に過ぎた時間の呪詛から逃れるのは易い。時間や仕事なら埋め合わせたり、やりなおしたり、自然に忘却したりすることもできる。だがひとたび触れた、人間の暗黒は、深まりこそすれ、それから解放されることは不可能である。たとえ、いまの私に、それらいつさいの事どもが、どうでもいいものとなったと呟いてみたところで、

第二章

最初、新聞がとりあげ、つぎに週刊誌や赤新聞などが徐徐に興味本位なスキャンダルに膨脹させていったプロセスで、私の信頼していた友人たちが示した態度も、私にはげせないもののほうが多かった。人には他人の成功よりも失敗を、より喜ぶ心理的傾向のあることは、一般論として知っている。また、その傾向は、不遇な者により旺盛であらうことも、簡単な推理で証明できることであらう。しかし、私の朋輩といえ、大半が大学教授であり、また法曹界の指導的人物たちだった。しかるに、その反応、および私の耳に伝わってくる反響は、耐えがたく不愉快なものであ